

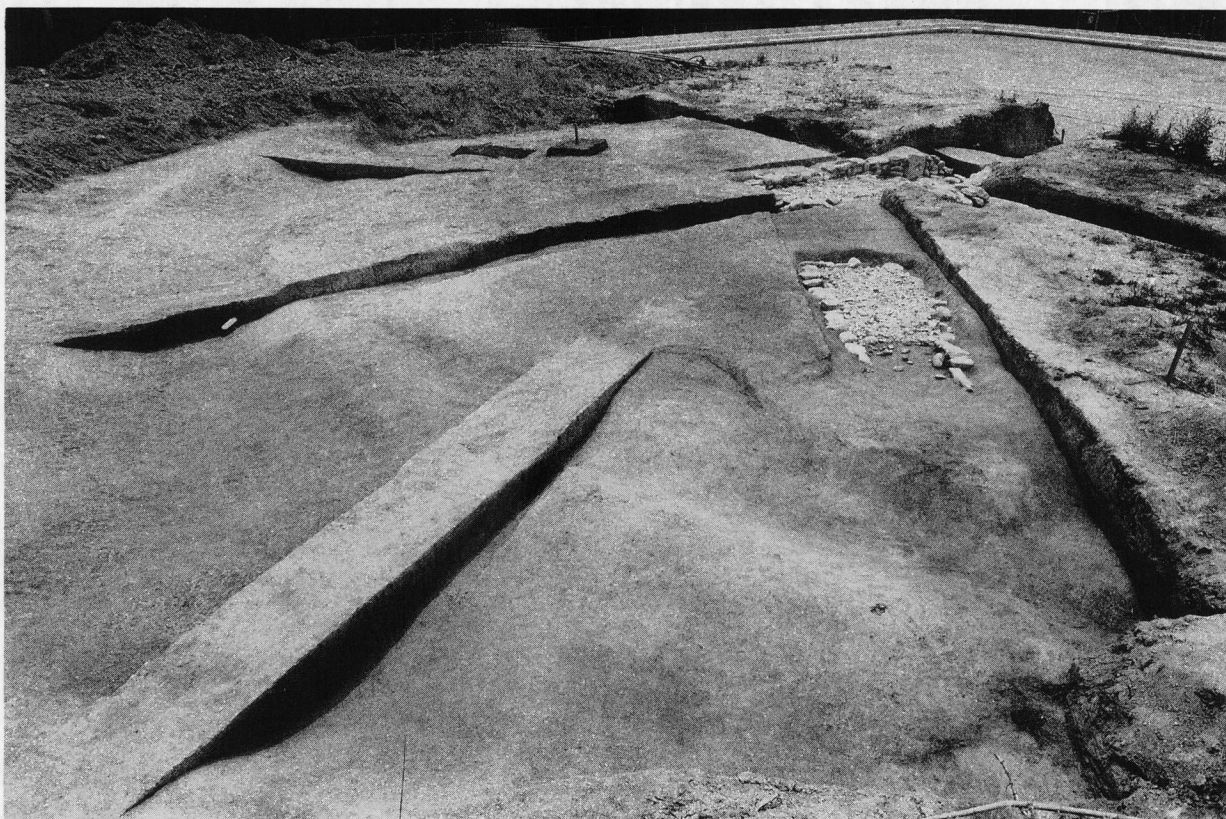
観音寺市内遺跡発掘調査概要報告書

上母神 8号古墳

(母神山古墳群)

1998. 3

観音寺市教育委員会



上母神 8 号古墳全景

(分平08時部一真尋空謙) 景全山(土匠)軒母



母神(羽上)山全景 (航空写真—昭和30年代)

例 言

1. 本書は、観音寺市教育委員会が埋蔵文化財調査事業として実施した発掘調査の概要報告書である。
2. 本事業は、観音寺市木之郷町字上羽上469-内第2-甲外に所在する上母神8号古墳において平成8（1996）年2月5日から平成8年（1996）9月27日まで実施された。
3. 発掘調査及び本書の執筆・編集、出土遺物の整理・実測は、観音寺市教育委員会事務局 生涯学習課 文化振興係 主任主事 久保田昇三が担当した。
4. 挿図の一部に国土地理院地形地図 観音寺（1 / 50,000）を使用した。図面の方位はすべて、磁針方位で示した。また、実測図の縮尺はすべてスケールで表示した。
5. 出土遺物は観音寺市郷土資料館で保管している。図面・写真等は観音寺市教育委員会事務局で保管している。
6. 本事業の実施にあたっては、三豊地区広域市町村圏振興事務組合の方々をはじめ、発掘調査に携わった坂田昇氏、西山秋久氏、松本光男氏のご協力を頂いた。記して謝意を表す。
7. 本書の執筆にあたっては、渡部明夫氏、片桐孝浩氏、笹川龍一氏、山本英之氏、川畑聰氏、蔵本晋司氏、阿河鋭二氏、片桐節子氏、堀田一夫氏、竹内良簡氏の助言・協力を得たので記して謝意を表す。

目 次

巻頭グラビア・例言・目次

	頁
1. 調査に至る経緯と経過	1
2. 立地と環境	1
周辺遺跡地図（1 / 50,000）	2
母神山古墳群分布図	3
3. 調査概要	4
地形測量図・トレンチ配置図	6
周辺地形測量図	7
第1石室・第2石室平面実測図	8
第1石室全体実測図	9
第2石室全体実測図	10
土層図	11
出土遺物実測図	13
4. まとめ	14
5. 研究ノート	15
6. 写真	23

1. 調査に至る経緯と経過

母神（はがみ）山は江戸時代の天保年間（1830～1843）の頃より盛んに発掘されはじめられたらしく、大正10（1921）年に刊行された香川県三豊郡史には車塚（瓢箪（ひさご）塚）付近の写真が掲載されているが、既に上母神8号墳の存在する場所は開墾され畑になっている状況が窺える。

平成7年1月に三豊地区広域市町村圏振興事務組合より三豊総合運動公園拡張事業（自由広場）に伴う埋蔵文化財の所在について照会を受け同年5月に事業対象地区内の試掘調査を実施した。結果、これまで未確認であった横穴式石室の一部が確認され、今回、遺跡の性格・年代等の詳細な資料を得るため発掘調査を実施するに至った。

2. 立地と環境

上母神8号墳がある母神山は羽上（はがみ）山とも呼ばれ、香川県観音寺市内にあり同市の粟井町、池之尻町、木之郷町にまたがる位置に立地し、山全体が花崗岩で形成され、周囲は約4kmある。また、同山は三豊平野（観音寺市・三豊郡）のほぼ中央部に位置し三豊平野全域と瀬戸内海を一望できる場所であり、山の南北には柞田（くにた）川と財田川が西方に向い瀬戸内海に流れ込んでおり、周辺地域は水利的にも恵まれた場所でもある。現在は、開発により山頂部が失われているが、記録では標高約92m程度であったようである。

また、母神山は6世紀代から7世紀代（古墳時代後期～終末期）にわたり県下でも屈指の古墳群が形成された場所でもある。母神山古墳群と呼ばれるこの古墳群は、かつては70基を越えて存在していたと推定される。代表的なものに、前方後円墳に周溝を有する瓢箪塚古墳【6c前半】、金銅製単鳳環頭太刀柄頭、三葉環頭柄頭、銀製冠立飾、金銅製馬鈴等が出土し複室構造の石室を持つ罐子（かんす）塚古墳【6c後半】、県下でも横穴式石室としては古手の部類に入る千尋（ちひろ）神社4号古墳【6c中葉】などがある。

なお、母神山には古墳時代のほかに弥生時代の壺棺等の遺物が出土しており、具体的な遺構の確認はされていないが、古墳群造営以前に弥生期の何らかの遺跡が存在していたと思われる。

母神山古墳群のある地域周辺は、律令体制下の讃岐国刈田郡紀伊郷の郷域に比定されている。郷内には延喜式内社の粟井神社（粟井町）、於（うえの）神社（粟井町）の2社があり、郡内にはその他のものをあわせると計6社（黒島神社、山田神社、高屋神社、加麻良神社）が存在する。また、郡名、郷名に深い関わりが想定される刈田氏（※）に関連する伝承がある乳若屋敷（粟井町）があることや母神山の麓にゴンゲ（郡家？）という地名が残されていることも非常に興味深い。また、紀伊郷に接する刈田郡柞田郷には南海道の柞田駅があったといわれ、刈田郡姫江郷（三豊郡大野原町）内には巨石を使用した大野原古墳群（椀貸塚、平塚、角塚、岩倉塚等）がある。また古代寺院には、母神山古墳群と大野原古墳群の中間あたりに紀伊廃寺（安井廃寺・青岡大寺）があり白鳳期の瓦の出土例がある。

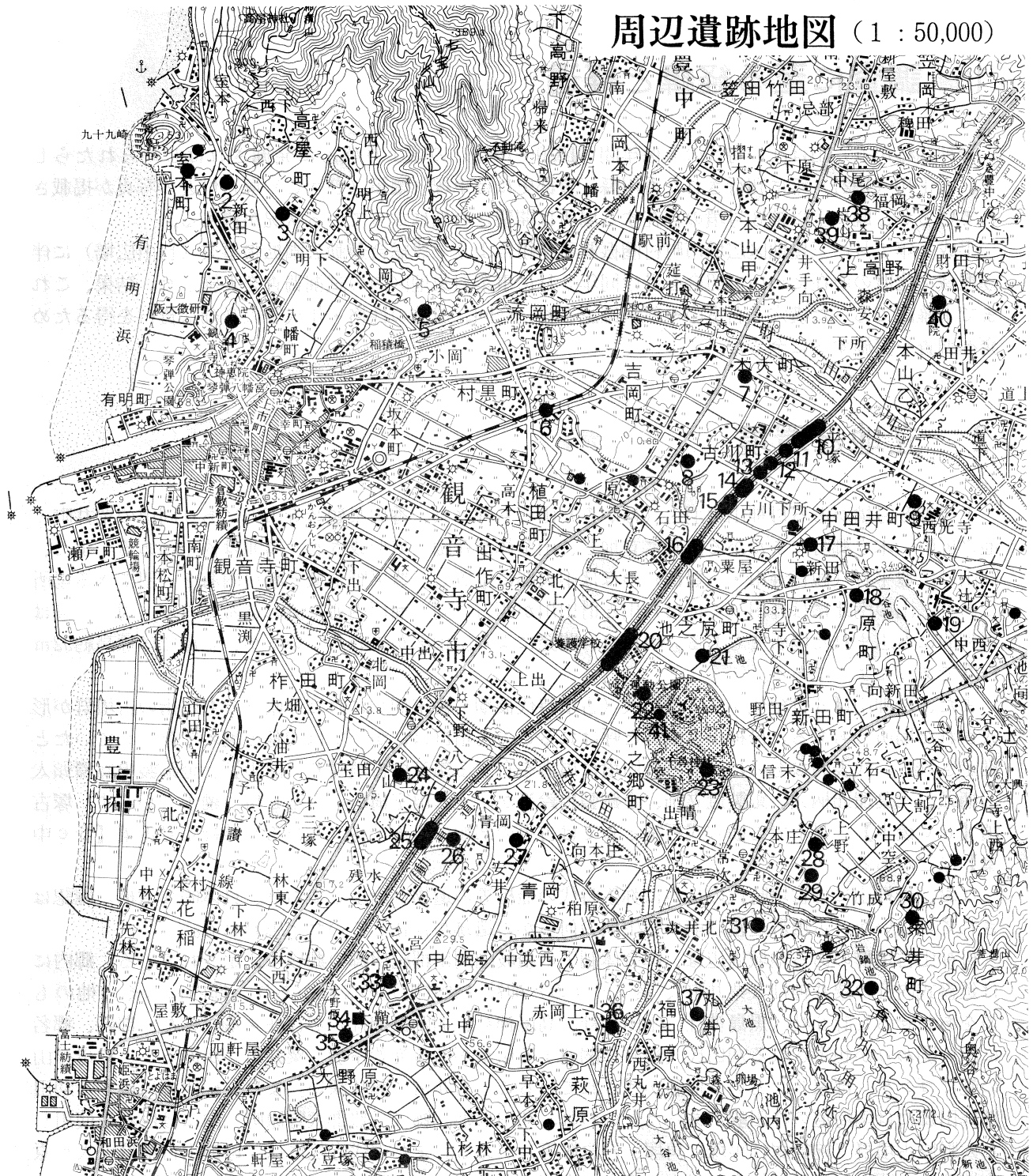
※刈田氏について（日本三代實録より抜粋）

貞観4年（862）5月 讃岐国刈田郡人直講従六位上刈田首安雄。散位従七位上刈田首氏雄。阿波博士従八位上刈田首今雄等三人。改本居隸左京職。

貞観9年（867）11月 左京人従五位下行直講刈田首安雄賜姓紀朝臣。安雄自言。武内宿祢之裔也。

仁和2年（886）5月 前周防守従五位上紀朝臣安雄卒。安雄者左京人。助教従五位下種繼之子也。…安雄父本姓苜田首。讃岐國人。至于安雄。賜姓紀朝臣。為京兆人。安雄幼以學見稱。性寬綽柔順訓物。始補得業生。天安二年為大學直講。貞観初。渤海國王遣使朝聘。以安雄為存問兼領客使。五年授外従五位下。九年授従五位下。轉助教。此時有勅。擇有識公卿大夫撰格式。安雄預之。十一年遷為勘解由次官兼下野介。十六年加従五位上。十八年遷為主計頭。明年出為武蔵守。政貴簡惠。吏民安之。秩滿距鵜歸京。元慶六年除鑄錢長官兼周防守。…

周辺遺跡地図 (1 : 50,000)



- | | | |
|---------------------|----------------------|-------------------|
| 1. 室本遺跡 | 15. 一ノ谷遺跡群 (山の前南地区) | 29. 乳若屋敷 (伝承地) |
| 2. 丸山古墳 | 16. 石田遺跡 | 30. 藤の谷遺跡 (銅剣出土地) |
| 3. なつめの木貝塚 | 17. 向井・西の岡遺跡 | 31. 平岡1号古墳 |
| 4. 興昌寺1号古墳 | 18. 青塚古墳 | 32. 岩鍋遺跡 |
| 5. 鹿隈籬子塚古墳 | 19. 辻西遺跡 (銅矛出土地) | 33. 椀貸塚古墳 |
| 6. 村黒遺跡 | 20. 長砂古遺跡 | 34. 角塚古墳 |
| 7. 樋ノ口遺跡 | 21. 久染遺跡 | 35. 平塚古墳 |
| 8. 古川遺跡 (銅鐸出土地) | 22. 鐘子塚古墳 (母神山古墳群) | 36. 赤岡山古墳群 |
| 9. 石ノ経遺跡 | 23. 久米東塚古墳 (母神山古墳群) | 37. 緑塚古墳群 |
| 10. 一ノ谷遺跡群 (平塚地区) | 24. 柞田駅跡 | 38. 大塚古墳 |
| 11. 一ノ谷遺跡群 (香門地区) | 25. 柞田八丁遺跡 | 39. 妙音寺 |
| 12. 一ノ谷遺跡群 (竹道北地区) | 26. 小天王塚古墳 | 40. 延命古墳 |
| 13. 一ノ谷遺跡群 (竹道南地区) | 27. 紀伊廃寺 (青岡大寺・安井廃寺) | 41. 上母神8号古墳 |
| 14. 一ノ谷遺跡群 (山の前北地区) | 28. 上野古墳 | |

3. 調査概要

上母神8号古墳のある場所は、1. の経緯と経過でも記したが、既に大正時代には開墾され農地として耕作されている状況が確認できる。当時の写真には、ここにかつてマウンドを持った古墳が存在していたとは思えない状況が撮されており、相当古い段階で破壊されていたことが想定できる。

その後、試掘調査の段階までは、竹が一面に繁茂していた状況もあり、横穴式石室が確認されるまで遺跡の存在は想定し難い状況であった。

試掘調査で確認された横穴式石室を中心に、墳丘規模、石室の状況等の確認のためN、W、S、S、E、E、NEの各トレンチを設定した。以下にその状況を記する。

- Nトレンチ ・表土より約15～20cmで版築土層を確認。
・墳裾および周溝については、開墾による破壊を受け確認できなかった。
- Wトレンチ ・石室の羨道部を確認。片側の石積は基底石と側壁の二石を残すのみであった。
・墓道は確認できなかった。
- Sトレンチ ・Nトレンチと同様に版築土層を確認。
・墳裾および周溝については、開墾による破壊を受けているがある程度推定できる状況が確認された。
- SEトレンチ ・周溝の一部を確認。
- Wトレンチ ・周溝の一部を確認。
- NEトレンチ ・試掘時に確認されたもののほかに、少し小型ではあるが、もう一つの石室（横穴式石室）を確認。

その後、二つめの石室が確認されたこともあり、表土層をすべて取り除き、その他の埋葬施設の存在の有無を確認するとともに、周溝の検出作業を行った。結果、二つめのほかには埋葬施設の存在は確認されず、本遺跡は一つの墳丘に二つの横穴式石室を有する古墳であることが確定した。また、周溝については、SEトレンチからNEトレンチ間で良好な状態で確認、検出できた。

次に、石室の状況であるが、試掘調査で確認された石室を第1石室とし、NEトレンチで確認された石室を第2石室とし、以下にその概要を記する。

- 第1石室 ・N-66°-W方向に開口する横穴式石室で全長約5mあり、玄室長約3.4m、玄室奥壁幅約1.6m、羨道長約1.5m、羨道幅約0.6mの規模である。但し、羨道については、築造当初には羨道長が現在残っている状態から約1.5m長い規模であったと推定される状況が確認された。
- ・玄室の床面は、二重構造になっており、上層面（第2床面-埋葬床面）はおもに径5～10cm前後の川原石を敷き詰め、下層面（第1床面）は大きいものでは長径30～40cm程度の比較的大きめのものを使用し全面に敷き詰める構造をとっている。なお、第1床面の右半分（玄室奥壁を背にして）は比較的扁平な石材が敷かれていることや、耳環、玉類もその部分から出土していることから、第1床面を形成する段階から何らかの意図があったのではないかと推測される。
- ・出土品には、須恵器（蓋杯、広口壺、短頸壺等）、耳環、鉄器（鉄鏃等）、ガラス小玉、算盤玉、管玉等が出土しているが、出土位置については相当な破壊と盗掘を受けているためあまり参考とはならないが、玄室入口の左袖部付近に多く確認された。
- 第2石室 ・N-59°-E方向に開口する横穴式石室で全長約3.8mあり、玄室長約2.6m、玄室奥壁幅約1.2m、羨道長約1.2m、羨道幅約0.8mの規模である。但し、羨道長については現存長であ

る。

- 玄室の床面は、第1石室と同様に二重構造になっている。

また、第1石室が奥壁側が高く羨道側が低い傾斜をもった床面であるに対して、第2石室はほぼ水平なものとなっている。

なお、石室全体の石材についても第1石室に比べ小ぶりなものを使用している。

- 出土品には、紡錘車、鉄鏃、ガラス小玉等が出土しているが、須恵器は出土していない。

また、第1石室と第2石室間の土層を確認したが、両石室の構築順序（前後関係）を示す状況は確認されず、同時に構築された可能性が高いと推測される。また、石室構築のため地山を掘り込む掘り方のようなものは確認されず、別な構築方法（簡略化？）で石室および墳丘が築造されたと考えられる。

- その他
- 今回の調査区内の上母神8号墳の北東側には、周溝状の溝状遺構と原型をとどめていないが古墳の石室を破壊しその石材を集めたと思われる川原石が集積されている状況が確認できた。出土遺物としては、7世紀後半のものと思われる須恵器が溝状遺構と川原石が集積されている場所より出土している。

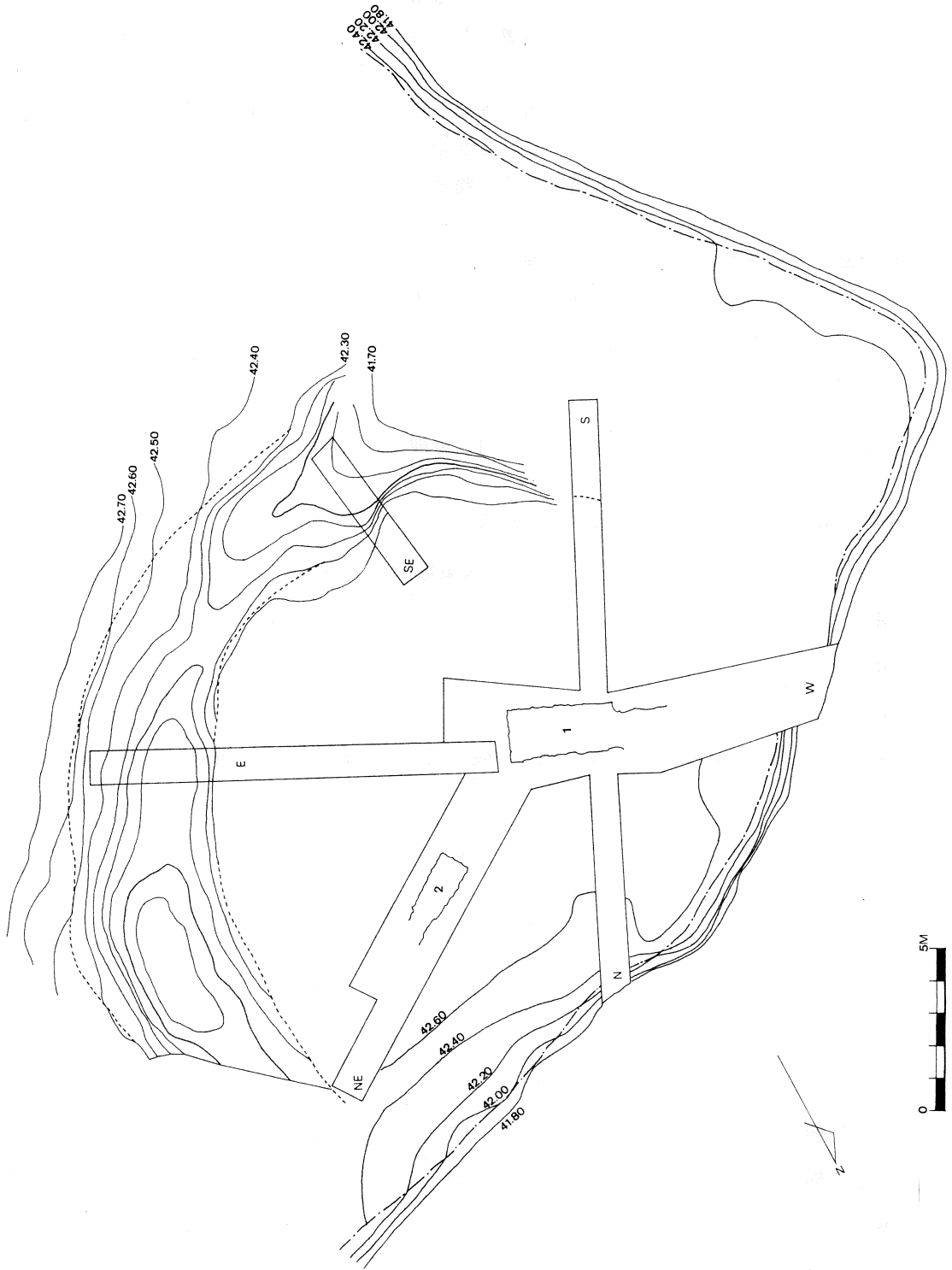
最後に、参考資料として上母神8号古墳と母神山古墳群内の主な古墳との比較を下表に記した。

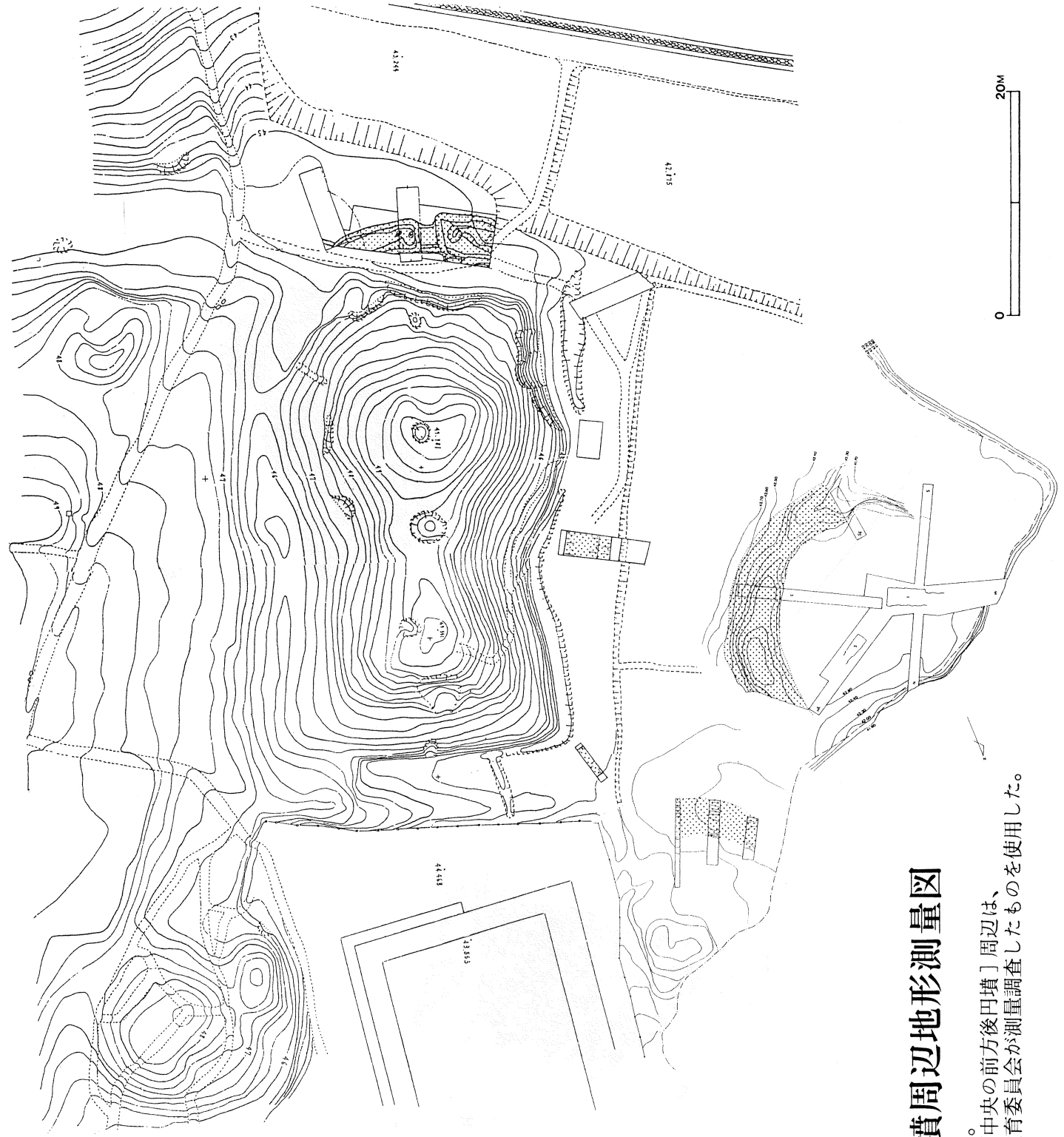
《参考》母神山古墳群内墳丘規模等比較表

	上母神8号		久米東塚	久米塚	籬子塚	黒島林1	千尋神社4
墳形	円墳		円墳	円墳	円墳	円墳	円墳
墳丘直径	19		21	21	30	20	16
墓域直径	27		24	—	40	—	—
埋葬施設	第1横穴式	第2横穴式	横穴式	横穴式	横穴式	横穴式	横穴式
袖形態	両袖式	両袖式	両袖式	両袖式	両袖式	両袖式	両袖式
開口方位	WNW	ENE	S	SSW	S	SW	NE
石室全長	6.5	3.8	9	6	9.8	5.8	5.35
玄室長	3.4	2.6	4.8	3	5.6	3.6	3.8
玄室奥幅	1.6	1.2	1.64	1.8	2.55	1.8	1.6
玄室高	—	—	—	—	3.2	—	—
羨道長	3	1.2	4.2	3	1.2	2.2	1.8
羨道幅	0.6	0.8	0.8	0.88	1.45	1.35	0.75
玄門幅	0.6	0.8	0.8	0.62	1.25	1	—
墓道	—	—	—	有	有	—	有
排水溝	—	—	—	有	有	—	有
特記事項	1墳丘2石室		—	—	複室構造	—	—
時期	6C末～7C前葉		6C後半	6C後半	6C後半	6C末	6C中葉
調査年度	平成7年		平成8年	平成7年	昭和48年	昭和41年	昭和48年

※(1)数値の単位はmである。

上母神8号古墳 トレンチ配置図・遺構測量図





上母神8号古墳周辺地形測量図

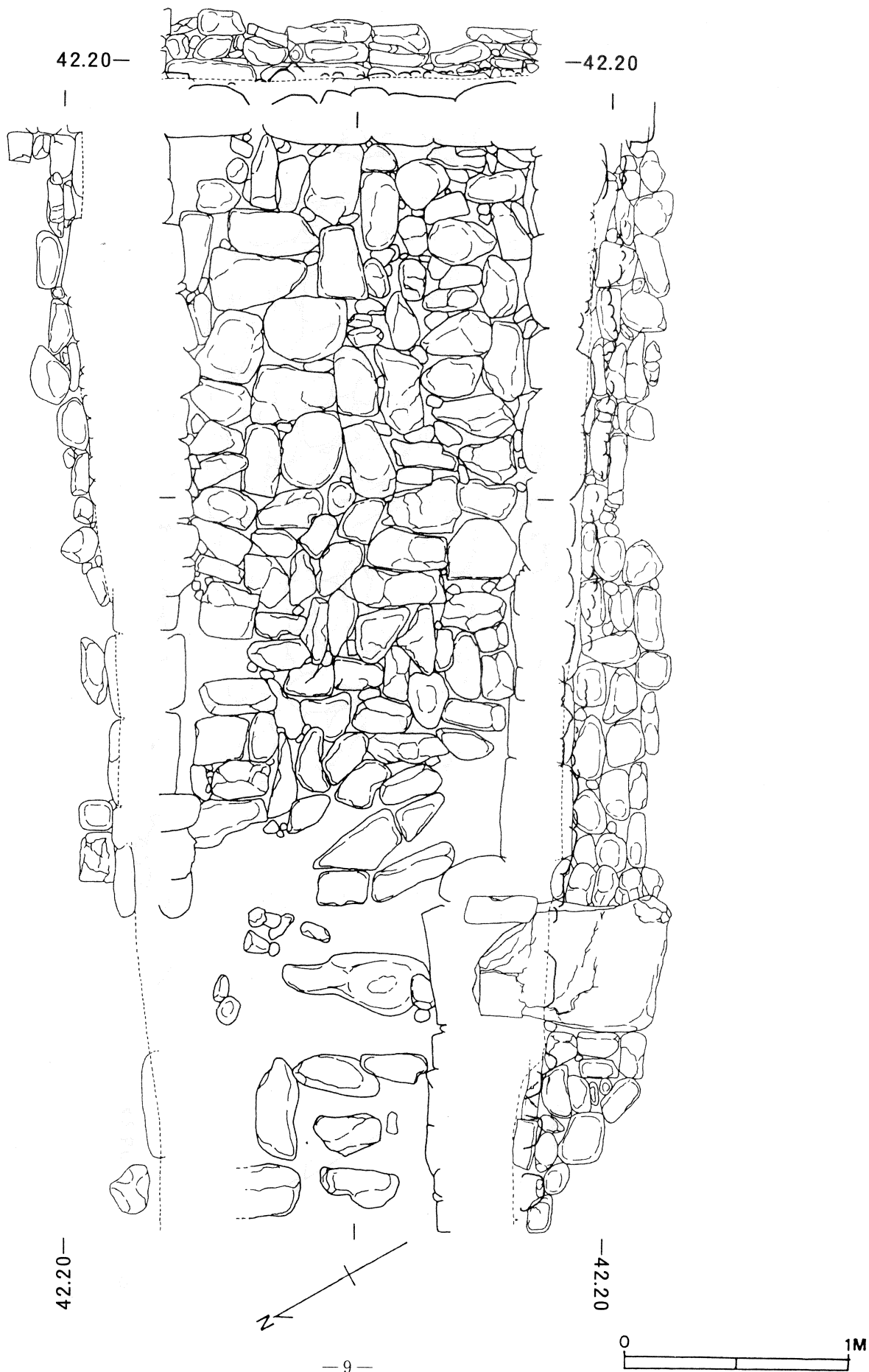
- ※ は周溝を示す。
- ※ は瓢箪(ひさご)塚[函面中央の前方後円墳]周辺は、昭和62年度に香川県教育委員会が測量調査したものをを使用した。

上母神8号古墳第1石室・第2石室平面実測図（床面は第2床面）

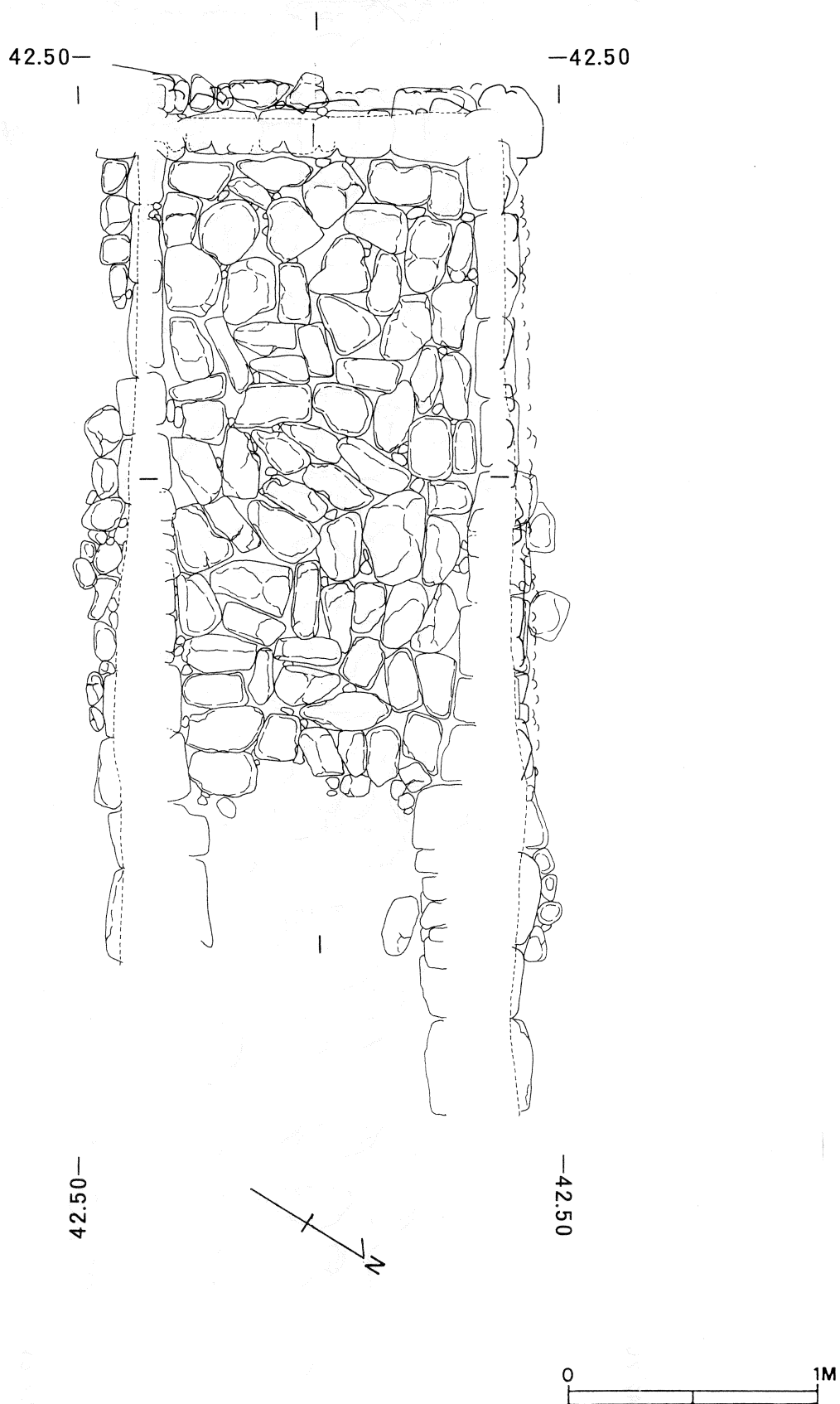


0 1 2M

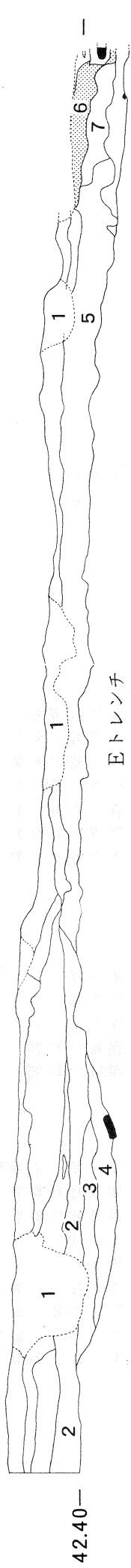
上母神 8 号古墳第 1 石室全体実測図 (床面は第 1 床面)



上母神 8 号古墳第 2 石室全体実測図 (床面は第 1 床面)



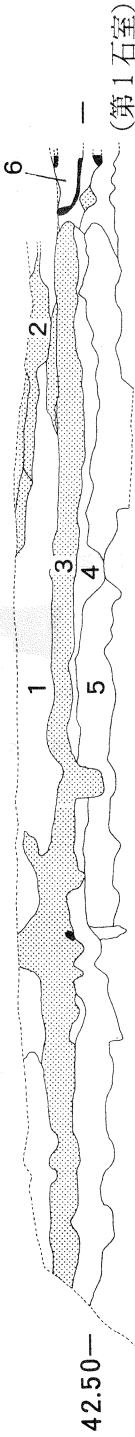
土層図(1)



- Eトレンチ
- 1. カクラン層
 - 2. 淡黄茶褐色粘質土
 - 3. 黄茶褐色粘質土
 - 4. 暗黒茶褐色粘質土
 - 5. 暗黄茶褐色粘質土
 - 6. 黒茶褐色粘質土
 - 7. 黄灰褐色粘質土

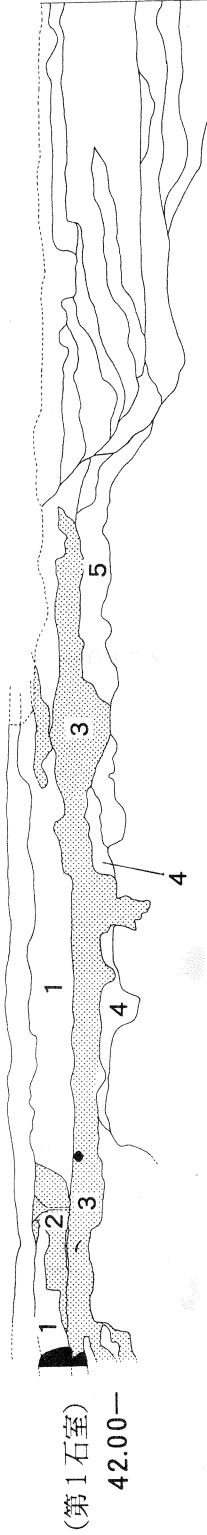
(第1石室)

- Nトレンチ
- 1. 黄灰褐色粘質土
 - 2. 明黒灰褐色粘質土
 - 3. 暗黒灰褐色粘質土
 - 4. 暗黄灰褐色粘質土
 - 5. 黄茶褐色粘質土
 - 6. 黄灰褐色粘質土



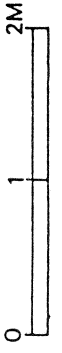
(第1石室)

- Sトレンチ
- 1. 黄灰褐色粘質土
 - 2. 淡黒灰褐色粘質土
 - 3. 暗黒灰褐色粘質土
 - 4. 灰黄褐色粘質土



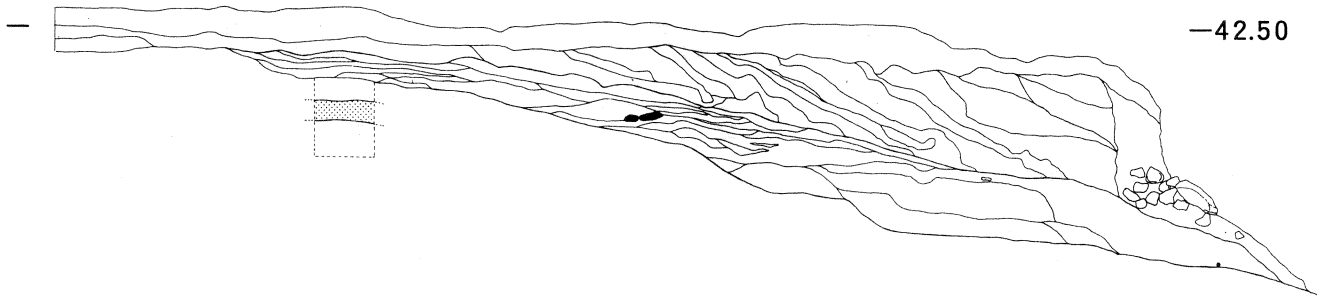
(第1石室)

42.00—

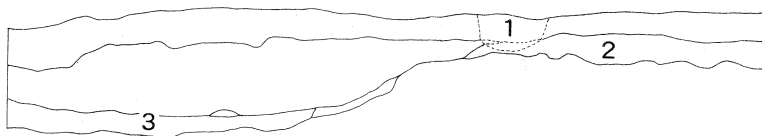


土層図(2)

Wトレンチ

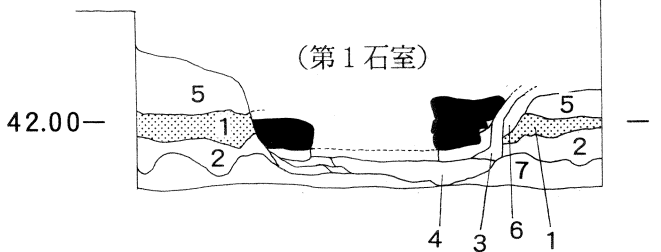
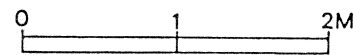


42.40-



SEトレンチ

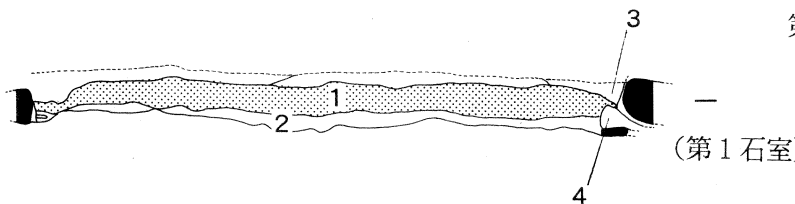
- 1. カクラン層
- 2. 黄茶褐色粘質土
- 3. 黄灰褐色粘質土



羨道部

- 1. 暗黒灰茶褐色粘質土
- 2. 灰茶褐色粘質土
- 3. 黄灰褐色粘質土
- 4. 暗黄灰褐色粘質土
- 5. 黄灰茶褐色粘質土
- 6. 明黄灰褐色粘質土
- 7. 黄茶褐色粘質土

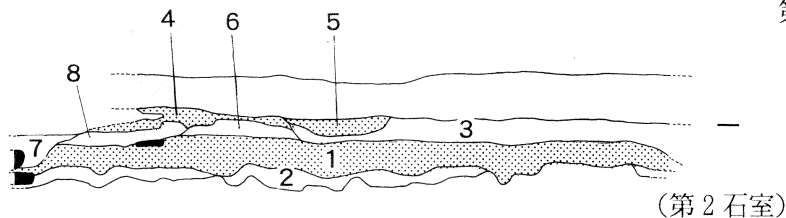
42.30-
(第2石室)



第1石室・第2石室間の土層(1)

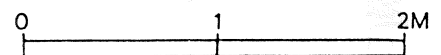
- 1. 黒茶褐色粘質土
- 2. 黄茶褐色粘質土
- 3. 黄褐色粘質土
- 4. 黄灰色粘質土

42.50-
(第1石室)



第1石室・第2石室間の土層(2)

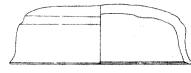
- 1. 黒茶褐色粘質土
- 2. 黄茶褐色粘質土
- 3. 黄灰褐色粘質土
- 4. 黒茶褐色粘質土
- 5. 黒茶褐色粘質土
- 6. 明黒茶褐色粘質土
- 7. 黄灰茶褐色粘質土
- 8. 黄茶褐色粘質土



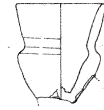
出土遺物実測図



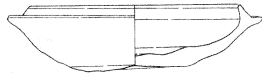
1



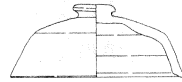
6



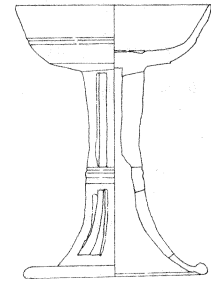
10



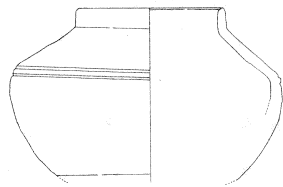
2



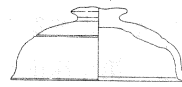
7



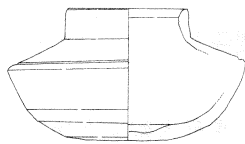
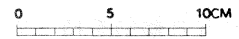
11



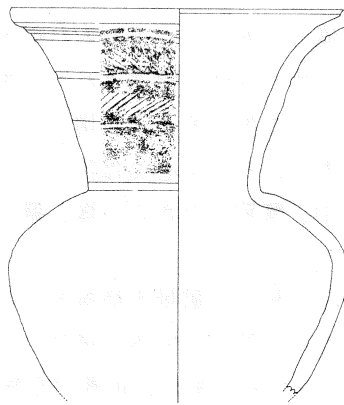
3



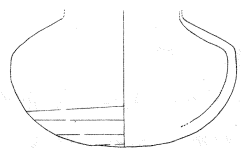
8



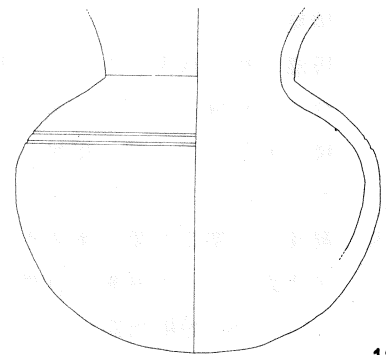
4



9



5



12



13



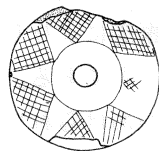
15



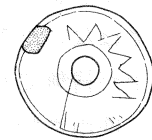
16



14



18



19



17



5 CM

4. まとめ

上母神8号古墳の概要並びに特徴を以下にまとめてみる。

1. 一つの墳丘に二つの横穴式石室を有する古墳である。
2. 二つの石室の配置は、他府県の多くの類例が並列という配置形態をとっているのに対して、異方向(125°)に石室を配置している。ちなみに、第1石室は西、第2石室は北東方向に開口している。
3. 二つの石室の規模は、第1石室が第2石室よりひとまわり大きく、使用石材についても第2石室のものに比べれば大きめのものを使用しており、両者には明瞭な格差がある。
4. 二つの石室は、両袖式の横穴式石室とみられる。第1石室は、片方が失われているが、もう一方は明確に袖部を形成している。但し、母神山古墳群でよく見られる玄門立柱は存在しない。第2石室は、無袖に近い形態をとっており、両者には石室構造の点からも明確に異なった構造をとっている。
5. 二つの石室の床面の構造はともに二重構造をとっており、両者とも最初に人頭大程度の石を敷き詰め(第1床面)、その上に玉砂利を敷き詰める(第2床面)構造である。特に、第1石室第1床面の右半分については平らな石が敷かれていることや第2床面のこの部分からは耳環やガラス玉が多く検出されていることなどから、あらかじめ第1床面を形成する段階で埋葬位置が意識されていたことが考えられる。第2石室についてはそのような構造はとっていない。また、第1石室の床面がかなり傾斜を持っているのに対して、第2石室はほぼ水平な構造であり、ここにも両者の違いがみられる。
6. 二つの石室間の土層の状況及び周溝の平面プランと石室の配置状況等の関係から、二つの石室は古墳築造当初より設計プランに組み込まれ同時に築造されたと推定される。
7. 周溝の検出状況、トレンチ調査等からの推定すると、墳丘直径約19m、周溝最大幅約5mで周溝を含めた墓域は直径約27mの円墳であり、その中心点は第1石室と第2石室の間あたりになる。規模の面から言えば、母神山古墳群中、瓢箪(ひさご)塚、鐘子(かんす)塚に次ぐ第3位の規模である。
8. 最後に、築造時期であるが、両石室が相当な破壊と盗掘をうけており、特に、第2石室については須恵器の出土が皆無の状態であったが、第1石室内の遺物により判断すると6c末～7c前葉(TK43～TK209相当期)のものとして推定される。また、追葬の有無については判断しがたい状況であった。

以上、上母神8号墳の特徴を述べてきたが、一墳丘に二つの石室を有し、二つの石室が並列せず異方向に配置される形態を持つ事例は全国的にも極めて特異まれなケースであり、その意味で貴重な資料が得られたのではないだろうか。ただ、破壊、盗掘等によりその残存状況が悪く、特に、第2石室からの須恵器の出土が皆無であったことは誠に残念なことである。よって、同時に構築されたであろう二つの石室が同時に使用されたのか、ある一定の時間があけられて使用されたものであるかは不明であり、また、追葬についても第1・第2石室とも追葬があったものか、片方の石室のみであったのか、あるいは追葬は無かったのか判断しきれない。それにもまして、二つの石室の被葬者の関係も夫婦であるのか、親子であるのか、兄弟であるのか、主従であるのか、親戚であるのかも想像の域を出ないのである。ただ、規模からみて母神山古墳群内では前述の様に第3位の規模を誇り、立地上からも唯一の前方後円墳の瓢箪塚に近接して築造されていることから恐らく瓢箪塚から鐘子塚に続く当地域の首長の系統あるいはそれに近い人物等が被葬者であろうことは想像に難くないが、それに加え、古墳の構造・形態が他のものに比べ異彩を放っており、その点から言えばある特殊な地位あるいは役割を担っていた人物像を想定できないだろうか。いずれにしても、今後については他の類例の検討は言うまでもないが、新たな発見の機会などを待ち慎重に検討していく必要がある。

5. 研究ノート

上母神8号墳に見られるような一つの墳丘に複数の横穴式石室が設けられている古墳についてその類例を別表に示した。別表のものがすべてではなく今後とも類似例の増加が予測されるが、意外にその類例が多く、また、その分布に片寄りがあることが判明し、形態的にも様々なものがあり、現時点ではそれぞれが持つ意味の解明には非常に複雑で難解な問題であると思われる。以下に、別表作成中に気づいた点や今後の問題点を整理してみる。

分布状況については別表によると、畿内では大和17、河内6、和泉1、摂津2、山城1の計27基、南海道では紀伊5、阿波1、讃岐6、伊予25の計37基、山陽道では安芸2、周防1の計3基、山陰道では丹波1、伯耆6、出雲1の計8基、西海道では筑前3、筑後1、肥前2の計6基、東海道では伊賀1、武蔵1、下総1の計3基、東山道では近江4、美濃2、信濃1、上野2、下野1の計10基、北陸道では若狭1、越前2、能登1の計4基であり、大和を中心とする畿内と紀伊、讃岐、伊予にかけての瀬戸内海沿岸の南海道の地域にその多くが分布していることがわかる。なかでも伊予の松山平野周辺地域については、その形態的な差異はあるものの、特にその事例が多く見られることは興味深い。このことを下表に整理した。

	前方後円(方)墳	円 墳	方(長方)墳	その他(不明含む)	計
大 和	2	7	7	1	17
河 内		2	3	1	6
和 泉	1				1
摂 津	1	1			2
山 城	1				1
紀 伊	3	1		1	5
阿 波				1	1
讃 岐		3	1	2	6
伊 予	3	13	3	6	25
安 芸	1			1	2
周 防	1				1
丹 波	1				1
伯 耆	6				6
出 雲	1				1
筑 前	1	1		1	3
筑 後	1				1
肥 前	1			1	2
伊 賀	1				1
武 蔵	1				1
下 総			1		1
近 江	3			1	4
美 濃	1		1		2
信 濃				1	1
上 野	1			1	2
下 野	1				1
若 狭	1				1
越 前		2			2
能 登			1		1
計	33	30	17	18	98

※墳形の不明なものや判別が困難なものについてはその他に含めた。

年代的な側面については、横穴式石室を採用していることもあり、築造年代が判明していないものを除き、おおむね6世紀初頭から7世紀中葉の間に築造されたものが大半をしめる。時期的な観点からみると前方後円墳や円墳や方墳など墳形による違いでその時代の特徴は認められない。

また、石室配置形態であるが、円墳、方墳等ではその大半が同一方向に開口する並列かほぼ並列の石室配置となっている。これが全体的な傾向であるといえるが、これ以外のものも少数であるが存在する。上母神8号墳や小正西古墳のように2基の石室の開口方向の角度が直角よりも若干鈍角にひらく（本書では異方向としているが）ものやお姫山古墳のように直角よりも小さい角度（鋭角）にその石室が配置されているものもある。また、直角に配置されている事例も不確かであるがいくらかあるようである。このような石室の配置形態でも並列、ほぼ並列、異方向（鈍角、鋭角、直角）など様々であり、その配置形態についても何らかの意味があり、そのような諸形態が存在すると思われるが、現時点では想像の域を出ない。しかし、このような多岐にわたる石室の配置形態は、このような一墳丘に複数の横穴式石室墳を考察するうえでは一つの重要な視点になりうると考えられる。一方、前方後円（方）墳については、2基あるものについては後円部1基、前方部1基の同一方向（主軸に直交・斜行が多い）に開口するケースが多くみられる。また、3基あるものについては前述のものに加えてクビレ部や造出部に配置されるケースがみられる。特異な例としては、葉佐池古墳の様に石室を異方向に4基配置するものや薄井原古墳の様に後方に2基主軸に直交しまったく逆方向に配置するものや天塚古墳の様に後円部に前述のお姫山古墳の様な配置形態をもつものなどがある。いずれにしても、石室配置形態については被葬者等の意識的なものが感じられ、今後とも注目していくべきであろうと考えられる。

次に、石室の規模についてであるが、明らかに複数の石室間で格差があるものとほぼ同規模のものであまり格差が認められないものがある。上母神8号、小正西古墳などが前者の典型例であり、舞谷古墳群、兵家夫婦塚などが後者の典型例である。おのずから、前者と後者ではそのもつ意味合いは違うであろうと思われるので、これもまたひとつの重要な第2の視点になると思われる。石室規模の大小で被葬者の生前の地位が反映されているとするならば、当然規模の格差のあるものと同規模のものでもつ意味合いが違うことが考えられ、前段で述べた石室配置形態とあわせて分類し考察すべき点であると思われる。その他として、石室規模並びに配置の特異なケースとして寺口千塚10号墳がある。中央に主となる横穴式石室がありその周囲に小型の石室を不規則に4基配置する形態であり、この地区に限定される形態であるが興味深い。

第3の視点として、石室構造がある。同一墳丘内に同一構造のものがある場合と異なった構造の石室が周居する場合がある。後者の例として、両袖式と片袖式がセットの場合、片袖式と無袖のセット、両袖と無袖のセットなどがある。同一墳丘内に石室を構築し埋葬するのであるから、互いに近い関係の人たちが埋葬されてしかるべきであり、当然、その石室構造もよく似た形式を採用するものと考えたいのであるが、それに反して構造を違えて石室を構築しているのである。構造の違いの意味するもの、それは果たして工人集団の違いだけであるものか、被葬者の生前の地位や担っていた役割などの違いによるものであるのか等、このことについても問題が多い。

第4の視点として、石室構築時期と石室使用（埋葬）時期（追葬を含む）の関係の問題がある。例えば、当初一墳一石室であった所にもう一つの墳丘と石室を重ねるように構築している場合（二古墳重複型）や同じく当初一墳一石室であったところに石室のみを追加している場合（石室追加型）、最初から計画的に複数の石室を一つの墳丘に構築する場合（同時構築型）などの事例がある。特に、同時構築の場合、その多くは複数の石室を同時に使用したとは考えにくく、最初の被葬者が埋葬される時点では最初に埋葬される以外の石室は、その石室に埋葬されるまで空の期間があるということになる。つまり、古墳を設計する段階からあらかじめ埋葬される人物を想定していたことが推測されるのである。つまり、同時構築の場合は、これまで述べてきた、石室配置、石室規模、石室構造は生前から埋葬される人物の意志が働いていると思われる。この状況は、本来横穴式石室がもつ特徴である追葬を同じ石室で行うことの性格が変容して、同じ石室に追葬するのではなく、同一墳丘内で事前に追葬のための別の

石室をあらかじめ準備しておき、追葬予定者が亡くなればその石室に追葬する（いわば追葬用石室）ように変化したのではないだろうか。これがいわゆる横穴式石室の個人墓化（単人葬化）で議論があるところであるが、これに加えて、複数の石室に追葬を行っている事例が葉佐池古墳などで確認されており問題をますます複雑にしている。以下に、不十分であるが現在筆者が考える複数の石室構築とその使用方法に関するモデルケース（試案）についてまとめてみた。

同 時 構 築			追 加 構 築		
A	○—● ○—●	同時使用 追葬無	H	○—● ○—●	追葬無
B	○—●—◆— ○—●—◆—	同時使用 追葬有	I	○—●—◆— ○—●—◆—	追葬有
C	○—● ○—●—◆—	同時使用 追葬有（片側）	J	○—● ○—●—◆—	追葬有（片側）
D	○—● ○—●	時間差使用 追葬無	K	○—●—◆— ○—●	追葬有（片側）
E	○—●—◆— ○—●—◆—	時間差使用 追葬有	【備考】 ○は石室構築時期を示す。 ●は石室使用（埋葬）時期を示す。 ◆は追葬時期を示す。		
F	○—● ○—●—◆—	時間差使用 追葬有（片側）			
G	○—●—◆— ○—●	時間差使用 追葬有（片側）			

以上、上記にモデルケースを示したが、当然、これ以外のケースも考えられなくはない。また、上記のものは一墳丘に二つの石室がある場合に限定しているので、これが3基、4基になればその様相はますます複雑なものとなるであろう。

最後に、全国の大多数の後期以降の古墳が一つの墳丘に一つの石室が約束事のようにしてつくられていることに反して、一つの墳丘に複数の横穴式石室が構築されている古墳（一墳丘複数横穴式石室墳）について、①石室配置、②石室規模、③石室構造、④石室構築時期と石室使用（埋葬）時期の関係と4項目の視点を述べてきたが、今後この複雑な問題の考察を行うには最初に述べた分布、年代の要素も加味したところで行うべきであると思われる。加えて、蝦夷穴古墳のように特定の氏族のものと考えられているものや皇室関係のものではないかと考えられているものもあり、そのような観点からも検討を加えていくべきではないだろうか。

30	前山B67号墳 (知事塚)	和歌山県和歌山市	紀伊	前方後円	全長30.5	2基 +整穴式石室	A 後円部 B 前方部	2.4 2.0	2.05 0.9	両袖 両袖				石室
31	前山BK-4号墳	和歌山県和歌山市	紀伊	円	径17	2基 +不明遺構	A 1号 B 2号	2.5 2.4	2 2	両袖 両袖				
32	上三山古墳	和歌山県西牟婁郡 すさみ町	紀伊	円or方	径40	2基 +箱式石棺	A B	2.3	2.1	右片袖		6c前半		石階5枚3区に屍床
33	三島1号古墳	徳島県美馬郡穴吹町	阿波	歪長楕円	全長15	2基並列	A 第1 B 第2	5.25 2.3	2.01				TK43	段ノ塚穴型
34	北山八坂古墳	香川県大川郡	讃岐	円	径15	2基ほぼ並列	A 1号 B 2号	6.2 2.5	3.4 1.3			6c後半 Aのすぐ後		追葬有 追葬有
35	佐岡1号・2号墳	香川県仲多度郡満濃町	讃岐	円		2基並列	A 第1 B 第2	9 7	2					未調査
36	山王山古墳	香川県三豊郡山本町	讃岐	長方形		2基並列						7c		
37	吉田4号・5号	香川県三豊郡財田町	讃岐	不明	不明	2基ほぼ並列	A 4号 B 5号	2.3 約3.8	2.6 1.1	片袖or両袖 無袖		6c末 7c中葉		
38	上母神8号古墳	香川県観音寺市 木之郷町	讃岐	円	径27 (円筒含む)	2基異方向 約125°	A 第1 B 第2	6.5 3.8	3.4 2.6	1.6 1.2	両袖 両袖(無袖に近い)	6c末~7c前葉		
39	小天王塚古墳	香川県観音寺市祇田町	讃岐	円or楕円	不明	2基異方向?	A B	4	1.2	無袖				未調査 未調査
40	お船山古墳	愛媛県川之江市片山	伊予	円	径23	2基異方向	A 1号 B 2号	6.5 6.4	3.1 3.4	1.9	両袖 両袖	6c末~7c初		追葬有
41	向山古墳	愛媛県川之江市金生町	伊予	長方形?	40×14	2基並列	A 墓塚 B 墓塚	11	4	2.4	両袖	7c第二四半期	TK217	切石大型石室
42	菜切り谷	愛媛県今治市	伊予	前方後円	全長30	2基	A 後円部 B 前方部	6.1	4.8	2.25	片袖	6c後半		埋没不明
43	治平谷1号墳	愛媛県今治市	伊予			2基異方向	A 第1 B 第2	2.26 3.08	0.79 1.34			6c前半 6c中葉		
44	治平谷2号墳	愛媛県今治市	伊予			2基並列	A 第1 B 第2	2.58 3.32	0.82 1.2			6c中葉 6c中葉		
45	治平谷3号墳	愛媛県今治市	伊予			2基並列	A 第1 B 第2	3.24 3.44	1.52 1.72			6c後半 6c後半		
46	治平谷11号	愛媛県今治市	伊予	円		2基	A 1号 B 2号	3.52 0.94	1.78 0.5	無蓋道		6c前半		
47	衣黒山3号墳	愛媛県越前郡大西町	伊予	前方後円	全長30	2基							TK43	詳細不明
参考	長田2号	愛媛県	伊予									6c前半~中	MT15~TK10	
48	新城3号	愛媛県北条市下灘波	伊予	長方形	長径32.5	2基	A B	9.1	7	2	両袖			石室有 未開口
49	新城5号	愛媛県北条市下灘波	伊予	長円 or長方形	全長約45	2基異方向	A 中央部 B 北端部	6 10.2	5 5.5	3.1 2.2	右片袖 両袖	6c後半 7c前半		
50	谷谷B地区2号墳	愛媛県松山市南江戸	伊予	円	径16	2基並列 +小石室	A A石室 B B石室	5.2 4	3 2.8	1.7 1.2	無袖 無袖	7c初頭		
51	影浦谷2号墳	愛媛県松山市山越	伊予			2基並列 +箱式石棺	A A主体部 B B主体部	3.2	1.8	0.8	蓋道無 整穴系横口式?	6c中頃~後半 Aと同時期?	TK10	
52	祝谷古墳	愛媛県松山市祝町	伊予	円	不明	2基並列								
参考	瀧辺古墳	愛媛県松山市瀧辺町	伊予	円	径12	2基	A 1号 B 2号	2.64 1.2	1.2 0.5	整穴式 整穴式		中期末~後期初頭		
参考	東雲神社古墳	愛媛県松山市藤山城	伊予	円		2基								
53	芝ヶ崎A号墳	愛媛県松山市鷹ノ子町	伊予	円	径15	2基並列	A B	4.84	3.94	1.85 2.25	右片袖			
54	芝ヶ崎B号墳	愛媛県松山市鷹ノ子町	伊予	円	径15	2基					両袖			羽子板形
55	芝ヶ崎C号墳	愛媛県松山市鷹ノ子町	伊予	円	径15	2基					両袖			羽子板形
参考	東山森が森1号墳	愛媛県松山市東石井町	伊予	円	径11	2基	A A石室 B B石室	2.9 2.3	1.3 1.1	整穴式 整穴式		同時構築		
56	東山森が森4号墳	愛媛県松山市東石井町	伊予	円	径13.7	2基ほぼ並列	A A石室 B B石室	6.3 3.5	3.2 2.3	1.8 1	両袖 両袖	7c第二四半期 6c末	TK217?	羽子板形
57	東山森が森8号墳	愛媛県松山市東石井町	伊予	円	径14	3基	A B C	6.8 2.8	4.1 1.3	2.2 1	両袖 横穴省略形	6c末~7c初頭 6c末~7c初頭		
58	川上神社古墳	愛媛県程良郡川内町	伊予	方or長円 or長円	36×21	2基	A 中央部 B	8	2.8		両袖	7c中葉	TK217	巨石墳 埋没不明
59	大下田2号墳	愛媛県伊予郡砥部町	伊予	長円	20×18	2基 +箱式石棺	A 1号 B 2号	5.2 6.2	3.2 4.5	1.65 1.9	両袖 両袖	6c後半 6c後半~末	TK43 TK43	
60	大下田3号墳	愛媛県伊予郡砥部町	伊予	長円	34×26	2基並列	A B	5.1 11.2	2.85 3.7	2 1.8	両袖 両袖	6c末 6c末	TK209 TK209	復築構造?
61	大下田4号墳	愛媛県伊予郡砥部町	伊予	円	径25	3基 AB並列	A B C	5.6 5.3	2.8 2.6	2.1 2	両袖 両袖 無袖	6c末 6c末Cの後 6c後半	Cの後 C→A→Bの順か? 追葬有	
62	大下田南8号墳	愛媛県伊予郡砥部町	伊予	方	10×10	2基								
63	うしま塚古墳	愛媛県松山市平井町	伊予	円		2基								

92	御幸田山遺跡 A区1号墳	群馬県渋川市	上野			2基直角?	A											
							B											
参考	浄土山古墳 (芝根村1号墳)	群馬県佐波郡王村町	上野	前方後円	48.5	2基?	A第1次墳丘											主軸に直交
							B第2次墳丘	8.33		2.44	無袖							
93	総社二子山古墳 (総社町11号墳)	群馬県前橋市総社町	上野	前方後円	89.8	2基	A 前方部	9.4	6.8	3.4	両袖							自然石乱石積み 削り石互目積
							B 後方部	8.7	4.4	2.2	両袖							
94	二ツ室塚古墳	栃木県那須郡碓氷町	下野	前方後円	46.5(推定)	2基	A 後方部	7.13		1.62	無袖							主軸にほぼ直交 主軸にほぼ直交
							B 前方部	4.8		1.42	無袖							
95	十善ノ森古墳	福井県速原郡上中町	若狭	前方後円	全長67	2基	A 後方部	4.2		2				5c末~6c前葉				羽子板形 主軸に直交 主軸に直交
							B 前方部	1.6		1.45	左片袖							
96	法土寺南遺跡3号墳	福井県福井市	越前	円		2基								後期				
97	法土寺南遺跡4号墳	福井県福井市	越前	円		2基								後期				
98	蝦夷穴古墳	石川県鹿島郡能登町	能登	方	25x25	2基並列	A 墓穴	9.2	2.2	3.25			磚積	7c中葉	TK217orTK46	T字形 逆L字形		
							B 墓穴	8.1	1.7	2.7								

- ※1・本表は一つの墳丘に2基以上の横穴式石室を持つ古墳を掲載した。(横穴1+竪穴式、箱式石棺等の事例は対象外とした。)
- ※2・空欄については、未調査、破壊、盗掘等により不明な事例や資料収集不足により掲載できない事例の両者が含まれている。
- ※3・数値の単位はmである。
- ※4・収集した資料の中には横穴式石室であると判断しがたいものも含まれているが、報告書に横穴式とあるものは掲載している。
- ※5・石室配置の欄では、並列、ほぼ並列、直角以外のものを異方向とした。なお、配置状況が不明なものについては石室数のみ記した。
- ※6・玄室幅の欄では、原則的に玄室奥壁幅を記したが、数値が不確かなものについては玄室最大幅を記した。
- ※7・竪穴系横口式石室は〔参考〕とした。また、舞谷2号は一基であるが〔参考〕として掲載した。
その他参考となる事例についても〔参考〕として掲載した。
- ※8・前方後円墳の石室名欄にはおもに石室の位置を記した。
- ※9・情報が新聞報道等のみで、詳細なものが不明なものについても、可能性が考えられる事例はできるだけ掲載した。
- ※10・いわゆる双円墳等については、今回対象外にした。

【参考・引用文献】

- 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅱ』 松山市教育委員会 昭和62~63年度
- 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅴ』 松山市教育委員会 (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1993
- 『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』 松山市教育委員会 (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1995
- 『松山市文化財調査報告書第15集 東山麓が森古墳群』 松山市教育委員会 S56.4.30
- 『松山市文化財調査報告書33 影浦谷古墳』 松山市教育委員会 (財)松山市生涯学習振興財団埋蔵文化財センター1993
- 『川之江市史』 川之江市 S59.11.1
- 『今治市埋蔵文化財調査報告書第4集 治平谷11号墳』 今治市教育委員会 S54.2.1
- 『奈良県文化財調査報告書第60集 シントク古墳群』 奈良県立橿原考古学研究所 1990
- 『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第62冊 寺口千塚古墳群』 奈良県立橿原考古学研究所 1991.3
- 『大和宇陀地域における古墳の研究』 宇陀古墳文化研究会 財団法人由良大和古代文化研究協会 1991.7
- 『前方後円墳集成 近畿編』 山川出版社 1992.12
- 『前方後円墳集成 中国・四国編』 山川出版社 1991.12
- 『前方後円墳集成 九州編』 山川出版社 1992.2.25
- 『前方後円墳集成 東北・関東編』 山川出版社 1994.2.15
- 『前方後円墳集成 中部編』 山川出版社 1992.2.25
- 『全国古墳編年集成』 雄山閣出版 1997.6.25
- 『舞谷古墳群の研究』 奈良県立橿原考古学研究所 磚塚研究会 (財)由良大和古代文化研究協会1994
- 『伊予三島市史 上巻』 伊予三島市 S59.11.1
- 『松山市史 第一巻』 松山市役所 H4.10.31
- 『松山市史料集 第二巻』 松山市役所 S62.4.1
- 『大阪府文化財調査概要1972-8 堂山古墳群発掘調査概要』 大阪府教育委員会 1973.3
- 『勇猛山古墳群』 佐賀県教育委員会 S42.1
- 『薄井原古墳調査報告』 島根考古学会 S37.3.31
- 『今治市桜井国分唐子古墳(墳墓)群調査報告 唐子台遺跡群』 今治市教育委員会 S49.5.25
- 『市民双書24 古代の松山平野-発掘調査資料を中心として-』 松山市教育委員会 S57.3.31

- 『日本の古代遺跡22愛媛』 保育社 S60.7.31
- 『愛媛の文化第六号』 愛媛県文化財保護協会 S42.10.20
- 『若狭上中町の古墳』 上中町教育委員会 S45.12.1
- 『奈良県史跡名勝天然記念物調査報告第21冊 大和二塚古墳』 奈良県教育委員会 S37.3.31
- 『季刊考古学・別冊3 東国の古墳』 雄山閣出版(株) 1992.11.20
- 『月刊文化財発掘出土情報』通巻145号 (株)ジャパン通信社 1994.12
- 『月刊文化財発掘出土情報』通巻149号 (株)ジャパン通信社 1994.4
- 『月刊文化財発掘出土情報』通巻156号 (株)ジャパン通信社 1995.10
- 『月刊文化財発掘出土情報』通巻163号 (株)ジャパン通信社 1996.5
- 『月刊文化財発掘出土情報』通巻170号 (株)ジャパン情報通信センター 1996.11
- 『地歴の窓 第11号』 香川県立観音寺第一高等学校地歴部 S55.3
- 『香川県史1』 香川県 1988
- 『香川の文化財(市町編)』 香川県文化財保護協会 S61.3
- 『満濃町史』 満濃町役場 S54
- 『観音寺市誌』 観音寺市 1985
- 『三豊郡史』 香川県三豊郡役所1912 (株)名著出版1973復刻
- 『黒島林第5・6号墳調査報告』 黒島林古墳群発掘調査団 1977
- 『母神山古墳群千尋支群第1・4・5・6号墳』 観音寺市教育委員会 1973
- 『全国遺跡地図 香川県』 文化庁文化財保護部 1977
- 『久米塚古墳』 観音寺市教育委員会 1996.3
- 『久米東塚古墳』 観音寺市教育委員会 1997.3
- 『新訂増補 國史大系〈普及版〉日本三代實録 前篇 後篇』 吉川弘文館 S49.10.1
- 『大阪府史 第1巻 古代編I』 大阪府 S53
- 『太子町の古墳墓』 太子町教育委員会 S53.3
- 『日本の考古学IV 古墳時代 上』 河出書房新社 S56.6.20
- 『和歌山県史 原始・古代』 和歌山県 H6.3.31
- 『和歌山県史 考古資料』 和歌山県 S58.2.25
- 『吉田古墳発掘調査報告書』 財田町教育委員会 1992.3
- 『小正西古墳 現地説明会資料』 穂波町教育委員会 H9.2.8
- 『小正西古墳』 穂波町教育委員会

6. 写真

目 次

1. 三豊平野全景（↓印は母神山）－雲辺寺山頂より
2. 上母神8号古墳周辺－航空写真
3. 発掘調査前の状況
4. 上母神8号古墳全景－南東側より
5. 上母神8号古墳全景－北東側より
6. 第1石室・第2石室の状況－北東側より（手前が第2石室）
7. 第1石室第2床面－北西側より
8. 第1石室第1床面－北西側より
9. 第1石室第2床面
10. 第1石室第1床面
11. 第1石室羨道付近
12. 第1石室玄室袖部
13. 第1石室遺物出土状況（その1）
14. 第1石室遺物出土状況（その2）
15. 第1石室遺物出土状況（その3）
16. 第1石室遺物出土状況（その4）
17. 第1石室遺物出土状況（その5）
18. 第1石室遺物出土状況（その6）
19. 第2石室第2床面
20. 第2石室第1床面
21. 第2石室第2床面
22. 第2石室第1床面
23. 第2石室遺物出土状況（その1）
24. 第2石室遺物出土状況（その2）
25. Nトレンチ
26. Wトレンチ
27. Sトレンチ
28. SEトレンチ
29. Eトレンチ
30. Sトレンチ第1石室側壁外側の状況
31. Eトレンチ第1石室奥壁外側の状況
32. Eトレンチ第1石室奥壁外側の状況
33. 第1石室羨道側壁と土層の状況
34. 第1石室・第2石室間の土層（手前第1石室側）
35. 第1石室・第2石室間の土層（第1石室側）
36. 第1石室・第2石室間の土層（第2石室側）
37. 第1石室基底石の状況
38. 第2石室基底石の状況
39. 出土遺物(1) 須恵器（第1石室）
40. 出土遺物(2) 須恵器（第1石室）
41. 出土遺物(3) 紡錘車 耳環 鉄鏃（第1石室）
42. 出土遺物(4) 耳環 管玉 ガラス玉 算盤玉（第1石室）
ガラス玉（第2石室）



1. 三豊平野全景 (↓印は母神山) - 雲辺寺山頂より



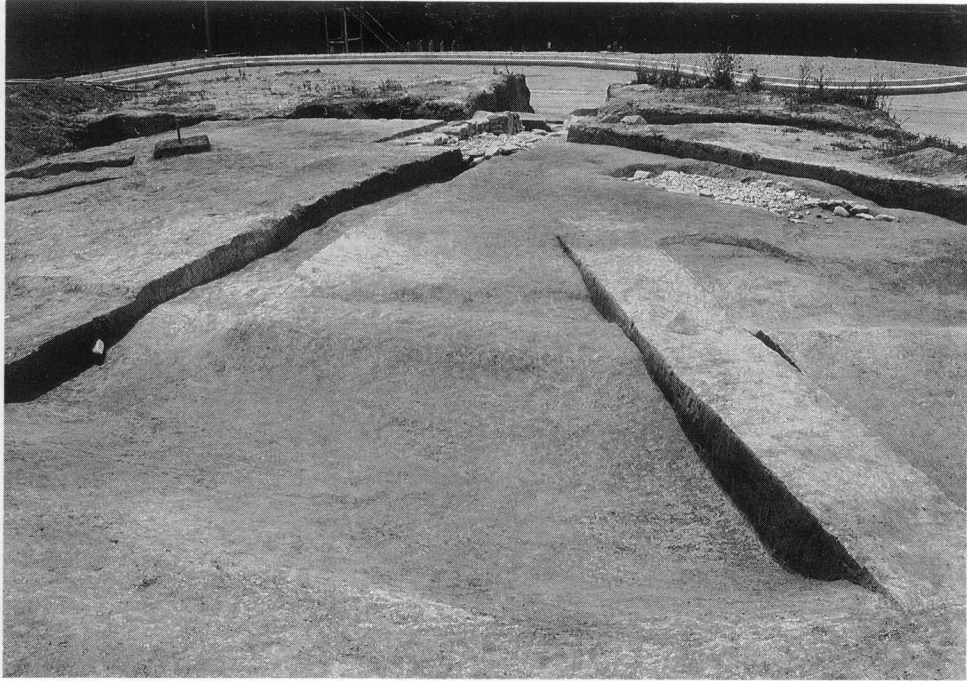
2. 上母神8号古墳周辺 - 航空写真



写真3. 発掘調査前の状況



写真4. 上母神8号古墳全景-南東側より



5. 上母神 8 号古墳全景—北東側より



6. 第 1 石室・第 2 石室の状況—北東側より (手前が第 2 石室)



7. 第1石室第2床面—北西側より



8. 第1石室第1床面—北西側より



图9. 第1石室第2床面



图10. 第1石室第1床面

(10子)



(10子)

11. 第1石室羨道付近

(10子)



12. 第1石室玄室袖部



13. 第1石室遺物出土状況（その1）



14. 第1石室遺物出土状況（その2）



15. 第1石室遺物出土状況（その3）



16. 第1石室遺物出土状況（その4）



17. 第1石室遺物出土状況（その5）



18. 第1石室遺物出土状況（その6）

(105)



(105)

19. 第2石室第2床面

(105)



20. 第2石室第1床面



(10子21.第2石室第2床面 景 33)



(10子22.第2石室第1床面 景 33)



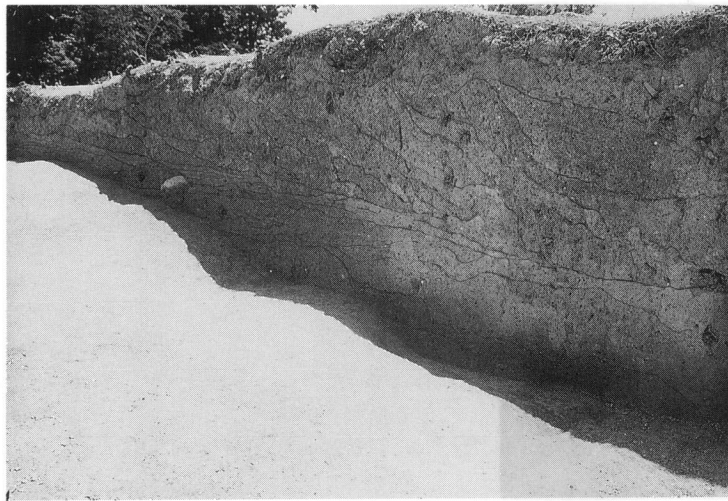
23. 第2石室遺物出土状況（その1）



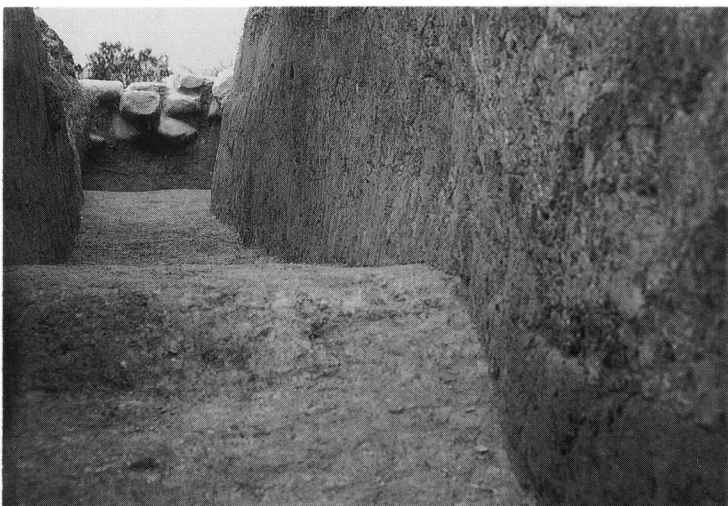
24. 第2石室遺物出土状況（その2）



25. Nトレンチ



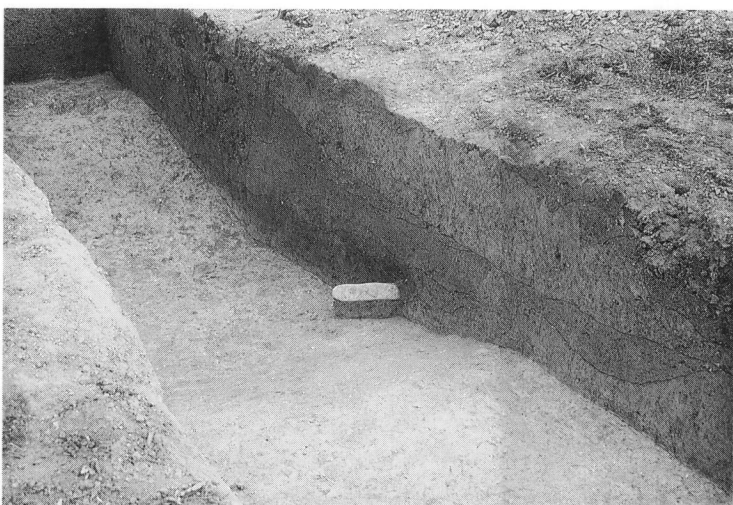
26. Wトレンチ



27. Sトレンチ



28. SEトレンチ



29. Eトレンチ



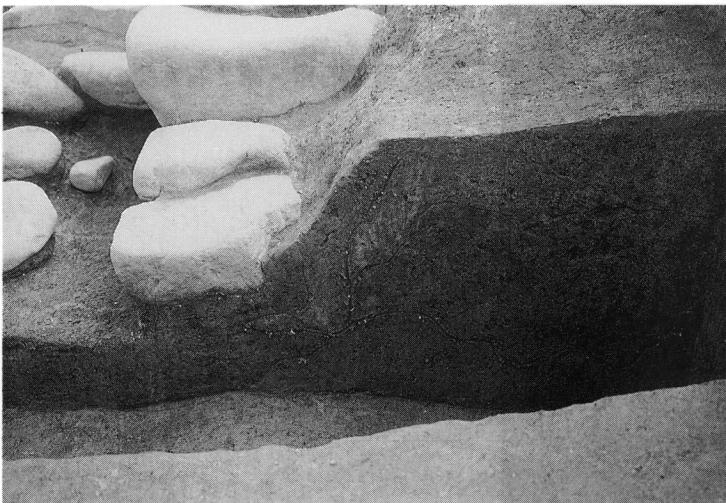
30. Sトレンチ
第1石室側壁外側の状況



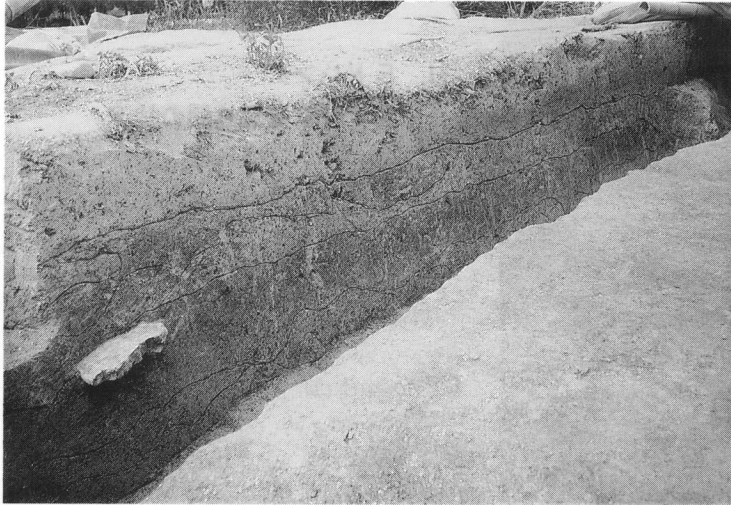
31. Eドレンチ
第1石室奥壁外側の状況



32. Eトレンチ
第1石室奥壁外側の状況



33. 第1石室羨道側壁と土層の状況



34. 第1石室・第2石室間の土層
(手前第1石室側)



35. 第1石室・第2石室間の土層
(第1石室側)



36. 第1石室・第2石室間の土層
(第2石室側)